

るまで誘ひるぬ、とばかりありて、里の子せりかなにか、かたみにつみもちたる三四人、おきなのが老かゝまりたるなどぞ乘ぐして来る、童部の船よりおりかね侍るを、こにや、むまごにや、たすけおろしなどして、我もいみじうくるしげなるも、何となく哀にぞ見侍りし、水鳥どもの河洲にむらがりゐたる、いとおもしろし、

船人も猶子を思ふ水鳥のすのまた川は波こゝろせよ

〔覽富士記〕すのまた川は、興おほかる處のさまなりけり、河のおもて、いとひろくて、海づらなどのこゝろし侍り。○中略

おもひ出るむかしも遠きわたり哉、その面かげのうかぶ小船に

利根川渡

上野國  
木野崎渡

〔萬葉集十四〕相聞

刀禰河泊乃可波世毛思良受多々和多里奈美爾安布能須安敵流伎美可母モ○中略

右二十二首上野國歌

〔藻鹽草五〕川

利根川  
上野

〔東路のつと〕明る朝、利根川の舟渡りをして、上野の國新田の庄に、禮部尙純隱遁ありて、今は靜喜かの閑居に五六日、連歌たびくにおよべり、

〔相馬日記〕廿一日○文化十四年八月、中略、野田の里を過て、木野崎のわたしをわたる、これぞ名にきこえし利根川にて、坂東にならびなき大河なれば、世には坂東太郎ともよぶなる、

〔甲子夜話三〕津輕領三馬屋渡ノ事

鳥越邸○浦氏ノ隣家川口久助ハ、當御代替ノトキ、陸奥國ノ巡見ニ赴シ人ナリ、一日予陸奥ヨリ蝦夷ニ渡ル海路ノサカシサヲ問ケレバ、答ニ津輕領ノ三馬屋ヨリ船出シ、松前ニ著トキ、船出セシ

三陸奥國  
馬屋渡